ひとはく研究員だより

身近な植物 未記載種多く

イボクサの仲間

李忠建 研究員

先日、日本植物分類学会の図書関連担当として、ある学術誌の最新号の受け取り確認をしていた時のことです。ふと中身が気になり確認してみると、私の研究しているツユクサ科のイボクサ属に関する論文が掲載されていました。「へえ、かの国にまでアレチイボクサが外来種として入ってきたとは」と思いつつ次のページをめくると、私は目を見開きました。掲載されている写真は、アレチイボクサではなかったのです。

イボクサといえば身近な水田雑草として目にすることが多く、イボクサ属で兵庫県に分布するのはこの1種のみです。しかしこのグループは、アジア・アフリカを中心に60種程度が知られており、世界的視野に立てば種数の多いグループです。

日本でも南西諸島に行けばシマイボクサが自生していますし、近年は外来種のアレチイボクサが見つかっています。植物園の温室や水草界隈（かいわい）では他の種類も取り扱われているようです。

このイボクサ属の特徴で重要なのが、花粉を作らない雄しべ、「仮雄しべ」です。仮雄しべはツユクサ科の植物を見分けるのに重要で、ツユクサの場合は6本の雄しべのうち黄色い仮雄しべが上に三つ並びますが、イボクサでは3本が仮雄しべになり、花粉を作る雄しべ3本とは互い違いにつきます。

しかし、シマイボクサ・アレチイボクサのなかまは花粉を作る雄しべが2本に減り、減った1本は糸くずのような退化雄しべとなります。花びらもやや左右対称です。この辺りの進化についてはほとんど研究が進んでいませんでしたが、最近になって論文を投稿しました。

ほとんど研究が進んでいないと言えば、実は地球上の種数もよくわかっていません。インドとブラジルに限れば、イボクサ属の新種記載はこの20年で大きく進みました。一方、日本の植物と関連の深い東南アジアの状況は、残念ながらあまりよく分かっていません。先日、タイ国植物誌プロジェクトの仲間と資料を共有しましたが、思った以上に多くの未記載種がありそうで、今後の宿題になります。

さて、冒頭の話に戻ると、外来種アレチイボクサの新産報告を読んだその日のうちに、「写真を見る限りシマイボクサではないか」と著者に連絡を取りました。両種は日本でも2015年まで混同されていましたが、慣れない方でも種子を見れば確実に識別できます。アレチイボクサは近畿や四国でも見つかっていますので、もし兵庫県内で見つけられたら、ぜひご連絡をお願いします。

兵庫県でも見られるイボクサ（上）と、外来種のアレチイボクサの花。アレチイボクサは左右対称

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。